

“変わってきた”若手サラリーマンの意識

財団法人 日本青少年研究所

事務局長 田 中 正

はじめに

戦時中の「滅私奉公」は論外としても、熟年族は勿論、戦後の昭和ひとけたあたりまでの価値観として、「自己犠牲」があった。

しかし、“ミーイズム”の時代といわれる現代の若者からみれば、「自己犠牲」など“ナンセンス”(この言葉もすでに古い流行語となった)なのである。

他人のために、また、会社のために、自分が犠牲になるなど、実に空しいではないかという反省が、若者の間で芽生え、戦後の民主主義教育や、高度成長による豊かな経済環境という土壌に支えられて定着してきたといえよう。

第1 勧業銀行が調査した「若者が中高年に幻滅する点」のトップは、

- (1) 上司、先輩に弱く、部下には強いこと (41.2%)
- (2) 自分の意見を押しつけること (37.8%)
- (3) 言行不一致の態度(30.2%)のほか、
- (4) 責任転嫁をすること
- (5) ゴマをすること
- (6) 感情的になること、があげられている。

また、「中高年で理解できない点」では、

- (1) 休日をつぶしてまで働くこと (32%)
- (2) 現在の会社や地位に執着すること (29.4%)
- (3) 若者への無関心や対立心(24.8%)

などが上位を占めるほか、新知識、新技術への無関心(18.4%)なども槍玉に上っている。

これらはいずれも、若者からみた“上司の幻滅

点”であるが、プラスのイメージがないわけではない。何と云っても、戦後の日本経済を担って、いまや世界に冠たる経済大国にのし上げた原動力である。さめた若者たちといえども一目おかざるをえないのである。

その魅力点のベスト3をあげると、

- (1) 仕事処理上の的確な判断力
- (2) すぐれた交渉力、折衝力
- (3) 知識、話題の豊富さ

といった仕事での評価があげられている。

要するに、仕事面では一目おくが、それ以外では全然評判が悪いのである。

若者、とくに20代のサラリーマンは、仕事も大切だが、私生活もまた、同様に大切にすべきだという人が多い。

このように変ってきた現代の若者は、職場で、日常生活で、一体どんな考えをもって行動しているのか?“現代若者気質”ともいべき側面を、いくつかの調査から観察してみたいと思う。

1. 新 入 社 員

新しく会社に就職するということは、学生時代とは全く異った別の人間関係の中へ入ることである。

学生時代は、気のあった仲間とだけつき合っていればよかったものが、会社に入ると、仕事上での関係があれば、いやおうなしに、どんないやな人や、苦手の人とも折衝しなければならぬし、

仕事にしても、学校で好きな課目を専攻するのと違い、自分の好き嫌いで選択することは殆んど無理な相談である。

リクルートセンターがまとめた今年の新入社員の意識調査によれば、「ビジネスマンに必要なものは」、

- (1) 実行力がある (48.3%)
- (2) 協調性がある (40.4%)
- (3) やる気、チャレンジ精神がある (38.6%)
- (4) 自己啓発、向上意欲が強い (35.1%)
- (5) 創造性、独創性がある (27.8%)

がベスト5に上っている。

また、「入社にあたっての不安」について、聞いたところ、

- (1) 仕事についていけるか (48.8%)
- (2) 性格的に、上司・同僚とうまくやっていけるか (33.1%)
- (3) 仕事をはなれて、上司・同僚とは、どの程度のつき合いをしたらよいか (32.4%)
- (4) 会社の雰囲気能适应できるか (30.7%)
- (5) 基本的な生活マナー、常識が不足しているのではないか (22.9%)

などの、さまざまな不安をいただいているのがわかる。このほか、「給料だけで生活していけるのか」(13.2%)は素朴な心配としても、なかには、「社内行事(運動会など)には、必ず参加しなければならないのか」などと、はじめから逃げ腰のものもあり(7.2%)、「残業が多いのではないか」(13.8%)「休日はキチンと休めるのか」(15.9%)といった自由時間の制約を心配するものも少なくない。

かつてのモーレッツ社員からみれば、何とも頼りなくみえるだろうが、自分に忠実で、仕事以外の時間も大切であると考えるフレッシュマン達にと

っては当然といえよう。

さて、それでは、入社は決った。

入社後、当面、自分は何をなすべきか?について尋ねた結果は、

- (1) 多くの人と接し、交流の輪を広げる (67.7%)
- (2) 余暇には、趣味やレジャーを楽しむ (45.1%)
- (3) 個人的な勉強や研究をする (42.4%)
- (4) 当面は、他のことを犠牲にしても、仕事に打ちこむ (36.1%)
- (5) 結婚資金を蓄える (18.8%)
- (6) マイホーム資金を蓄える (7.2%)

となっている。(1)については無難な回答だが、具体的にでない。(2)は現代の若者のレジャー志向を表わし、(3)の勉強や研究はよいが、個人的なところ、現代若者気質がのぞいている。

(4)は本音が建前かは別として、いかにも会社の幹部が喜びそうな答えて、仲々立派!

(5)はまあまあとしても、(6)は中高年からみると“10年早い”気がしないでもないが、堅実といえないこともない。

ちょっと余談になるが、現代コミュニケーション所長の坂川山輝夫氏によれば、今春の新入社員のタイプは「マージャンパイ」だそうである。

形が揃って並べ易いが、崩れ易く、安全パイもあるが、危険パイもある。というわけだ。

2. 交遊関係

中高年族が、ヤレ家のローンだ、子供の教育費だと苦しんでいるなかで、“独身貴族”と呼ばれている若手サラリーマン、OL達は、一体、どういふ友達と、どんなつき合い方をしているのだろうか。

富士銀行の調査によれば、男性の場合、一番多いのが「職場の友達」で平均6.3人、次が「子供時代の友達」で5.9人、「スポーツ・レジャーの

友達」4人で、女性では、「学生時代の友達」がトップで平均6.5人、次いで、「職場の友達」が5.3人、「スポーツ・レジャーの友達」は男性と同じ4人となっている。

ここで注目すべきは、男性のトップが「職場での友達」をあげている点で、交遊関係においても、完全に仕事から抜けきれないということか。それでは、「友達と合って、どんなことをするのか」では、男性のトップが「飲んだり、食べたりする」で58.6%、次に「雑談する」52.4%、「スポーツをやる」が45.9%の順。

女性では、「おしゃべり」77.7%、「飲食」が67%、「ショッピング」が60.7%である。

“おしゃべり”も忘れないが、“食べること”と“おしゃべり”はそれ以上に楽しいということか。

また、1ヶ月のこづかいは、男性の平均が5万2千円、女性の平均が、4万1千円で、サラリーマン全体の平均が、3万8千円というから、やはり“独身貴族”という名称もオーバーでないのがわかる。

3. 余暇の過ごし方

都内に住む20才~23才の男女社会人の余暇の過ごし方について、三菱総合研究所が調査したところによると、男性では、

- (1) レコード・カセット (92.3%)
 - (2) スポーツをする (82.1%)
 - (3) バブなどに行く (46.1%)
 - (4) パチンコ (33.3%)
 - (5) 旅行・マージャン、将棋など (20.5%)
- 女性の場合、
- (1) スポーツをする (85.2%)
 - (2) レコード・カセット (81.5%)
 - (3) ショッピング (69.1%)
 - (4) 旅行・バブなど (39.5%)

(5) 料理をつくる (39.5%)
である。

これでもわかるように、若者の心をとらえているのは、音楽とスポーツといえる。

熟年の余暇の過ごし方といえば、読書・散歩・ゴロ寝でTVといったところが主流なのに比べて、さすがにヤングは行動的である。

4. 好みのタレントは?

本論と直接関係ないかもしれないが、現代の若者の人間の好みのタイプを知る上での一つの参考データになると思うので、ちょっと変わった調査を紹介しよう。

“LPGを基盤とする商社”岩谷産業が、20代の男女社員各100名を対象に調査した「一緒に仕事をしたいタレント」ベスト5は、男性が望む職場の花として、

- (1) 古手川祐子(23%)、(2) 宮崎 美子(20%)
- (3) 田中 裕子(14%)、(4) 松田 聖子(11%)
- (5) 中原 理恵(11%)で、

女性が望む同僚男性像は、

- (1) 西田 敏行(29%)、(2) 桑田 佳祐(27%)
- (3) 藤 竜也(24%)、(4) 沢田 研二(20%)
- (5) 武田 鉄也(19%)であった。

中高年族からみれば、共感できる人もいれば、“そうかなあ”と思う人もいる。年代の相違である。

5. 会社をやめるとき

折角、就職して頑張ってはみたものの、われに利あらず、離職のやむなきにいたる場合もある。それはどんなときか?

就職情報センターの「転職者の意識調査」によれば、

- (1) 仕事に発展性を感じなかったから。(44.9%)

- (2) 経営方針、上司の方針に疑問を感じたから (39.1%)
 - (3) 会社の将来に不安を感じたから (24.8%)
 - (4) 世間に比べ、給料が低いから (23.9%)
 - (5) 休日が少なく、残業が多いから (20.5%)
- と続いている。

昔から、給料と労働条件は、会社をやめる大きな理由の一つであるが、現代の若者にとっては、とくに「休日が少なく、残業が多い」というのが、

かなりのウェイトをもつようである。

以上、若手サラリーマンを中心に、現代若者の意識と行動の一端を垣間見てきた。

自分に忠実であることは、それなりによいことではあるが、その結果が、職場からの離脱現象となり、会社の活力にまで影響を及ぼすことになれば、日本の経営の将来に、黄信号がともることになりかねない。

今後の対応がまたれるところである。

